

待ちにま^{った}稲刈り

白浜小学校 五年 伊東 莉望

「莉望、明日始めるかい。」

おじいちゃん^が言った。私はその言葉をず^っと待^っていた。稲刈りが始まる。私はすぐに支度をして、近くに住むおじいちゃん^の家にお母さんと向^かった。

なぜ私が稲刈りを楽しみ^にしていたかと言^うと……。

三月二十日、お米の種まきをした。私の担当は、種がまかれた箱を、ハウスへ運ぶこと。ハウスの中は、暑くて大変だったけれど、ハウス一面に並べる^ことができた。おじいちゃん^が、

「自分で種をまいて育てみなよ。」

と言^った。私はうれしくて、

「やったー。やりたい！」

とすぐに返事をした。おじいちゃん^に、まき方を教えてもらいながら、種をまいた。

「いつ菜が出るの？」

とおじいちゃんに聞くと、
「一週間位あれば芽が出るぞ。水やりはじい
ちやんがやるから大丈夫。」
と教えてもらった。私は芽が出る一週間後が
とても楽しみだった。

三月二十六日、ハウスに行つた。一面緑色
に芽が出ていて、私がまいた種も元気に育
ていた。

四月二十三日、田植えが始まった。田んぼ
に行くとおじいちゃんが、

「蒔望が手植えするところ、残しておいたぞ
と言ってくれた。ワクワクした気持ちで、右
足を田んぼに入れた。この「ニユルツ」とし
たどろの感触が、たまらなく気持ちいい。苗
を三本ずつ取り、手で植えた。どろに足をと
られ、尻もちをついて、ビショビショのどろ
んこだらけになつてしまった。

「おこられるかな？」と思つたけれど、
「頑張つたしよろこ。上手に植えられたね。」
とお母さんやおはあちゃんにもほめてもら

えた。

八月二十三日、楽しみにしていた稲刈りが始まった。私の手植えした稲も大きくなって、先にはたくさん実が付いていた。それをカマで自分で刈り取った。このお米を食べたい。という気持ちでワクワクしながら稲刈りをした。

刈り取った稲をかんそうさせ、もみすりをし、玄米になり、精米してもらい、お米を炊いて私の口に入れることがすごくうれしくて感動した。この一粒一粒は、おじいちゃん、おばあちゃん、お母さん、私の心のこもったお米で、どんなお米にもかえられない、最高級のお米になった。

「おじいちゃんみたいに、自分で育てた食べ物で、みんなを笑顔にできるお仕事につきたい。」私のしよる来の夢ができた夏になった。